



神戸大学経済経営研究所

Research Institute for Economics and Business Administration, Kobe University

■コラム

RIEB ニュースレターNo.284 2026 年 8 月号

出張と偏愛

神戸大学 経済経営研究所
特命准教授 山本 明日香

6 月末、ベルギー・アントワープでのカンファレンスに参加した。私にとって初めてのヨーロッパ訪問の機会となった。論文がジャーナルの（いわゆる）若手研究者奨励賞に選ばれ、その授賞式があったのだ。大元を辿れば、それは私の修士論文である。まだ私が学部生あるいは院生だった頃から暖かく見守ってくださった先生方、職員の皆様、出欠連絡が二転三転しても快く対応してくださり、会場でも積極的に声をかけてくださった欧州開発研究訓練機関協会の関係者やカンファレンス参加者の皆様、卒業論文提出時期に指導教員の返信が遅くとも辛抱してくれた、9 月卒業予定の指導学生の皆さんには、この場をお借りして感謝を述べたい。研究者としても教育者としてもまだまだなので、引き続き精進します。

さて、カンファレンスの合間に訪れたのが、レッドスターライン博物館。会場のアントワープ大学からは、歩いて 30 分ほどの距離にあった。大西洋航路の海運会社、レッドスターラインの建物が再利用されているようだ。1873 年から 1934 年にかけて、レッドスターラインは欧州各地からやって来た約 200 万人を北米へ運んだ。アントワープに到着した人々は、この一帯で健康診断や手荷物・衣類の消毒などを受けたという。展示されている当時のアントワープの街並みは、今とそれほど変わらない。



レッドスターライン博物館の外観（筆者撮影）

この航路の代表的な乗客として紹介されていた 1 人が、当時 5 歳のイスロエル・ベイリン。ロシア系ユダヤ人だったベイリン家は、貧困や宗教的な差別、そしてそれに伴う暴力（ポグロム）から逃れるために、1893 年、ラインランド号に乗ってアメリカに移住したそう。イスロエルはニューヨークの移民街で貧しい幼少期を過ごす、やがてショー・ビジネスの世界に入り、膨大な楽曲の作詞・作曲を手掛けることになる。彼こそが後のアーヴィング・バーリンである。あまり下調べをせずに訪れたので、バーリンの名前や彼のピアノ、お孫さんのインタビュー映像を目にすることになったのは驚きだった。



アーヴィング・バーリンのピアノ（筆者撮影）

そして、驚いたのがもう 1 人。有料のガイドブック[1]でひっそり言及されていた、フレデリック・アウステルリッツ（フリッツ）である。フリッツはレッドスターラインのウェスタンランド号に乗って、エリス島へ渡ったらしい。その子、アデル&フレッドのアステア姉弟はブロードウェイで成功を収め、姉アデルの引退後、弟のフレッドは映画業界へ進出する。フレッドの自伝[2]には、フリッツは「1895 年にニューヨークへやって来た」としか書かれておらず¹、私は彼がどんな経路でオーストリアからアメリカへ渡ったのか、考えたこともなかった。

私は映画を熱心に観るほうではないが、例外がある。フレッド・アステアのミュージカル・コメディ映画は、ほとんど観ている。アステアとバーリンが組んだ映画は、数え間違いがなければ *Top Hat* (1935)、*Follow the Fleet* (1936)、*Carefree* (1938)、*Holiday Inn* (1942)、*Blue Skies* (1946)、*Easter Parade* (1948) の 6 作品。最初の 3 作はジンジャー・ロジャース、次の 2 作はビング・クロスビー、最後はジュディ・ガーランドとの共演作品である。どれもアステアの代表作と言ってよく、“Top Hat, White Tie and Tails”、“Cheek to Cheek”、“Let’s Face the Music and Dance”、“Puttin’ On the Ritz”、“Steppin’ Out with My Baby”あたりの

¹ ガイドブックによれば、実際は 1892 年とのこと。

有名曲は全てバーリンによるものだ。特にアステア&ロジャース映画といえば、バーリンの楽曲を思い浮かべる人も少なくないだろう。先述した映画や楽曲について一つひとつ語りたいところだが、さすがに自重しよう。未視聴の方はとりあえず王道の *Top Hat* (1935) を観てほしい。あれほど短く優雅で格好いいオープニング・クレジットを私は知らない……要するに、このコラムで言いたいことは「思いがけず聖地巡礼ができて嬉しかったです」というだけなのだが、寛容な方はもう少しお付き合いいただきたい。

重厚なストーリーや深いメッセージ性などに期待してはいけないし、現代の価値観からすれば倫理的に問題のある表現も少なくない。それでも、私はこれらの映画が好きである。そこには純粋な音楽の楽しさ、エンターテインメントがあるからだ。どのシーンでも、彼らは歌うべき時に歌い始め、そして踊る。一連の流れは、不思議なほど軽やかだ（完璧主義者のアステアや、それに付き合わされた共演者の圧倒的な練習量がそう見せているのだろう）。優雅なダンスもあれば、鋭いタップも、愉快的ナンバーもある。古さを全く感じないという嘘になるが、どこかアニメ的で、タイムレスでもある。世界恐慌の時代、大衆はアステア&ロジャース映画に熱狂したそうだが、辛いことを一時でも忘れられる魔法のような力は、90年経った今でもまだ作品に残っていて、私にはよく効く。

初めてその存在を認識したのは、マイケル・ジャクソンの自伝[3]だった²。前付けにて、“This book is dedicated to FRED ASTAIRE”という一文の下に、シルクハットに燕尾服、ステッキを持ったアステアの写真が掲載されている。今ならそれが *Silk Stockings* (1957) の宣伝用スチール写真だと分かるが、中学生で初めてそれを目にしたときは随分と古臭く見えたものだ³。なんとなく敬遠してしまい、実際にアステア映画を鑑賞するようになったのは、ここ数年のことである。この配信全盛期に DVD や Blu-ray を集めている始末だが、幸い、Prime Video などでも気軽に観られる作品も少なくない。

アステア映画は、軽い前作ネタが出てくることはあれど⁴、基本的には1本1本が独立している。同じ人物が同じ曲を歌うことはほとんどないが⁵、*Shall We Dance* (1937) と *The Barkleys of Broadway* (1949) における “They Can’t Take That Away From Me” だけは特殊ケ

² この自伝は、アステア死去（1987年）の翌年に出版されている。最近公開された *Michael* (2026) でも、アステアは（やや唐突に）名前だけ出てくる。

³ なお、この写真の衣装で踊る “The Ritz Roll and Rock” は映画のクライマックスでもある。アステアはまさに若者文化として爆発している最中であつたロックンロール風の音楽で踊り（作曲はコール・ポーター）、ステッキを噛み、最後には自身のトレードマークであるシルクハットを叩き潰す。古臭いどころか、かなり攻めたナンバーである。アステアは撮影当時57歳で、この映画を最後に、ミュージカル映画へのレギュラー出演を終える。

⁴ 例えば、*Roberta* (1935) における “I Won’t Dance”。

⁵ 同じ曲が別作品で使われること自体はしばしばある。例えば、*Holiday Inn* (1942) と *Easter Parade* (1948) における “Easter Parade”。

ースと言っている。 *Shall We Dance* (1937)の音楽を担当したのは、アイラ&ジョージのガーシュウィン兄弟である⁶。

The Barkleys of Broadway (1949)は、もともと *Easter Parade* (1948)で共演したジュディとアステアの共演作品第 2 弾として動き出した企画らしい。しかし、ほどなくしてジュディは体調不良によって撮影の続行が困難になり、代わりに出演を打診されたのがジンジャーだったそう。完成した映画本編は驚くほどに、観客が持っていたであろうアステア&ロジャースコンビのイメージ（あるいは幻想）と劇中のキャラクターを重ねるような作りになっている⁷。この映画のファンサービスっぷりはものすごい。開幕からダンスシーンを見せてくれるし、コンビは共演 8 本目の *Carefree* (1938)でようやく初のキスシーンがあったほどなのだが（しかも夢オチ）、この映画では開始 1 分 50 秒でキスをする。「ほらほらこういうのが見たかったんだろ？」と言わんばかりである。作曲担当はハリー・ウォーレン、作詞担当はアイラ・ガーシュウィンだが、1 曲だけアイラ&ジョージの曲が使われている。それが“*They Can't Take That Away From Me*”である⁸。ジンジャーの自伝[4]によれば、この楽曲を再び使用することは彼女のアイデアだったそう。

共通の友人の計略と意地の張り合いの結果、別居中ながら 2 人でステージに上がることになったジョシュ&ダイナのバークレー夫妻。アステアは、懐かしいこの曲を歌い、やがて 2 人は踊り始める。VHS すらなかった時代、ファンにはたまらないシーンだったに違いない⁹。劇中で、夫ジョシュとのミュージカル・コメディの舞台を離れ、ストレート・プレイへの挑戦を志したダイナだったが、紆余曲折を経て成功を収めた後、結局は自由なミュージカルの世界に戻ってくる。現実の世界では、これが最後のアステア&ロジャース映画となった一方で、観客の記憶の中で、アステア&ロジャースはいつまでも生き続け、歌い、踊り続ける。ラストシーンのジョシュとダイナに、私は同時に存在する二つの事実を重ねてしまい、

⁶ アステア映画だと、ガーシュウィン兄弟は *Shall We Dance* (1937)のほか *A Damsel in Distress* (1937)の楽曲も担当している。前者は 5 月公開、後者は 11 月公開で、ジョージ・ガーシュウィンはその間、1937 年 7 月に亡くなっている。また彼らは、アステア姉弟が出演したブロードウェイ・ミュージカル *Lady, Be Good!* (1924)と *Funny Face* (1927)の楽曲も手掛けている。アステアとジンジャーの初邂逅は、ガーシュウィン兄弟による *Girl Crazy* (1930)の練習中だったそう（顛末についてはそれぞれの自伝が詳しい）。

⁷ アステア&ロジャース映画は、脇役だった *Flying Down to Rio* (1933)を含めれば RKO で 9 本撮られたが、*The Story of Vernon and Irene Castle* (1939)を最後に、コンビを解消していた。*The Barkleys of Broadway* (1949)は MGM 制作、唯一のテクニカラー作品である。

⁸ なお、*The Barkleys of Broadway* (1949)のバージョンではカットされているが、この曲の冒頭の歌詞ではバーリンと彼の“*The Song Is Ended (but the Melody Lingers On)*”が引用されている。

⁹ 残念ながら日本では未公開に終わったらしい。

いつも涙なしでは観られない。肉体は滅びても、作品は残るのだ。

晩年、アステアはインタビュー[5]にて、ヴァーツラフ・ニジンスキーの踊りを観たことがあるかどうか、また姉アデルのパフォーマンスの映像がほとんど残っていないことについてどう思うかと問われ、「観たことがない、彼は自分より前の時代のパフォーマーだからだ」、そして「そもそも、(当時は)全ての動きが永遠にみられるということを、深く考えたことがなかった」と述べている。それから40年以上経った今も、技術は絶え間なく進歩している。

優れた研究は後世に残るだろうが、そうでないものはどうなるのか。誰かの役に立つような研究とは何だろうか。一介の研究者ができることとは何だろうか。私はどのように生きていくべきだろうか——。そんなことを考えた¹⁰。

さて、これは余談だが、インド経済研究者の端くれを名乗っておきながら、私はそれほどインド映画を観ていない。これではいけないと思い、3年前、ムンバイでの用務のついでに国立インド映画博物館を訪れた。とても近代的な施設で、展示にもかなり力が入っていたように記憶している。1900年代のはじめに誰がどこで映画上映を行っていたのか、女優の不足により(社会規範もあるだろう)男性が女性役を演じる場合もあったこと、マハトマ・ガンディーと *Ram Rajya* (1943)、戦時下や分離独立時の映画産業……。無声映画の時代から現代に至るまで、様々な映画製作者や出演俳優、各地のスタジオなどが紹介されていた。

中でも印象に残ったのが *Alam Ara* (1931)。この映画は国内初のトーキーで、劇場公開時には観客が殺到するほどの人気を博し、統制のために警察が出動することもあったそうだ。そして、映画だけでなく劇中歌も大ヒットし、この作品が今日のインド映画の重要な出発点になったのだと。博物館を出た私は、早速この映画を観てやろうとインターネットで検索した。しかしほどなくして、それはすでに「失われた映画」となっていることを知り、愕然とするのだった……(そんなことは展示に書いていなかったはず!)。盛り上がりかけた私の情熱も失われ、残念ながら現在に至る。

¹⁰ その答えらしきものは、*Shall We Dance* (1937)のクライマックス“Shall We Dance”で歌われているようにも思う。



国立インド映画博物館前のモニュメント（筆者撮影）

参考文献

- [1] Nadia Babazia et al., *The Red Star Line Museum, Antwerp*, Ludion, 2014.
- [2] Fred Astaire, *Steps in Time: An Autobiography*, 1959〔篠儀直子訳『フレッド・アステア 自伝—Steps in Time』青土社、2006年〕。
- [3] Michael Jackson, *Moonwalk*, 1988〔田中康夫訳『ムーンウォーク—マイケル・ジャクソン 自伝』河出書房新社、2009年〕。
- [4] Ginger Rogers, *Ginger: My Story*, 1991〔渡瀬ひとみ訳、柳生すみまろ監修『ジンジャー・ロジャース 自伝』キネマ旬報社、1994年〕。
- [5] The Kennedy Center, *Kennedy Center Honors Legend: Fred Astaire (In-Depth Interview)*, YouTube, 2022. <https://www.youtube.com/watch?v=wIPOheVTEv0>